



本と(ホント)の出会い

幼児教育学科 専任講師 千葉 直紀

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

仙台から上田に移り住み7ヶ月が過ぎた。上田に来てから民話の世界に魅了されている。きっかけは実習の巡回で松本を訪れる際に通った道路だった。ご存知の通り上田から松本へ行くときは急勾配の峠がいくつもある。右を見ても左を見ても山ばかり。その道を通りかかっていると不思議と絵本『たつのこたろう』(2010, 講談社)を思い出した。この絵本は保育者として仙台で働いていた時から大好きで、その世界を子どもと楽しんだことが思い出される。簡単なあらすじを言うと、山ばかりで石ころだらけの、作物もあまり取れない地域に住む龍の子太郎という少年が、母を探しに行く物語である。途中、鬼や天狗などが出てきて、様々な出会いの中で遅くなっていく太郎。その後は広い土地を求めて龍の姿をした母と共に山を切り開き、湖の水を流して広い土地を手に入れるという話である。

上田から松本へ抜ける道中でふと頭に浮かんだ『たつのこたろう』はただ周囲の景色が物語を思い出させただけではなかった。知りたくなったら止まらない性分の私は、次の日に図書館を訪ねた。すると『信濃の民話』(2008, 一草舎)という本に出会った。インターネットなどの力を借りて調べてみると何と『たつのこたろう』の物語は上小地域の民話「小泉小太郎」や松本に伝わる「泉小太郎」から来ていることが分かった。『信濃の民話』を見ると興奮した。何と「小泉小太郎」の話の冒頭に「むかし独鈷山というけわしい山に…」とある。独鈷山とは、いつも研究室から見ている山だ。“あの山の麓で龍の子太郎は暮らしていたのか…”もちろん民話であるため、事実とは違うこともありうるであろうが、そんな民話の世界が息づいているこの土地の趣が自分の中にある好奇心をかきたてる。松本の「泉小太郎」の話は松本の台地は実はむかし湖で、などということもインターネットにはある。諸説あるようでどれが本当なのかは分からないが、松本の盆地もそのことを容易に想像できるような形をしている。

山の大きさ、自然の大きさ、それと物語がピタリと重なる。火のないところに煙は立たないように、何も無いところからはこれほど豊かな民話は生まれてこないはずである。この土地に大昔から住んでいた人々の生きるための知恵や苦しきなど多くのことが内包されている。沢山の民話が生まれるということはそれだけ多くの人々の人生がそこにあったともいえる。民話の中身には少しの付加はあるにせよ、この土地に生きてきた人々の暮らし、魂は本物であり、真実であるといえる。そんな真実との出会いのきっかけは「本」である。本によって「ホント」のことに出会ったり、「ホント」のことが見えてきたりすることがある。ただ何も考えずこの土地に住むことはもったいない。多くの民話があるこの土地に根付いている生きることの奥深さという軌跡や真実から学びながらその良さを存分に堪能していきたい。

目次

本と(ホント)の出会い
学校司書に求められる4つの職務
ことばをつかうこと/ことばにつかわれること
～ 新任のご挨拶にかえて～
本の面白さを伝える人に
『本』が教えてくれたもの
好きな本
国立国会図書館での研修を終えて
上田女子短期大学教員が学生にすすめる本
本学教員の最新刊著作
上田女子短期大学附属図書館企画展
第20回図書館総合展

CONTENTS

幼児教育学科 専任講師	千葉 直紀	1
総合文化学科 専任講師	斎藤 直人	2
幼児教育学科 専任講師	高田 正哉	3
幼児教育学科 1年	保科 里帆	4
幼児教育学科 2年	矢沢明日香	4
総合文化学科 1年	宮澤 恵衣	5
総合文化学科 2年	坂田 果穂	5
幼児教育学科 教授	上原 貴夫	6
総合文化学科 教授	長田 真紀	6
		6
		7
		8

学校司書に求められる4つの職務

総合文化学科 専任講師 齋藤 直人

みなさんは、小・中・高等学校時に学校図書館をどのように利用したでしょうか。たとえば、貸出や返却、読書、調べ学習、読み語りなどのサービスを受けるための利用もあれば、一息つくための居場所としての利用もあるだろう。

そこで本稿では、学校図書館の機能を担う学校司書の職務について、文部科学省の諮問委員会による報告「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について(報告のポイント)」※を紹介する。それに加えて、私が7年間学校司書として小・中学校に勤務した経験から、学校司書に求められる職務について一事例を概観したい。

「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について(報告のポイント)」

- ① 読書センター；学校図書館が読書活動の拠点となるような環境整備、学校における読書活動の推進や読む力の育成のための取り組みの実施等
- ② 学習センター；司書教諭や教員との相談を通じた授業のねらいに沿った資料の整備、児童生徒に指導的に関わりながら行う各教科等における学習支援等
- ③ 情報センター；図書館資料を活用した児童生徒や教員の情報ニーズへの対応、情報活用能力の育成のための授業における支援等

これらの役割を踏まえ、学校図書館担当職員は、図書館資料の管理、館内閲覧・館外貸出などの児童生徒や教員に対する「間接的支援」や「直接的支援」に加え、各教科等の指導に関する支援など「教育指導への支援」に関する職務を担っていくことが求められる。

上記報告には、学校司書がこれまでも実践してきた図書館事務や図書館整備、奉仕などの職務に加えて3センター機能および居場所について言及している。つまり、学校司書に求められる職務が多岐にわたり、かつ高度化しているといえよう。

つぎに、私が学校司書として勤務したなかで、特に重要視した職務が2点ある。それは①統計作成と、②居場所づくりだ。①統計作成では、貸出冊数や来館者数、蔵書構成などがあたる。これらの客観的な情報は、次年度の図書館教育への指針となる。つまり、各センター機能の根幹となる情報だ。また、複数年にまたがって統計を作成すると、学校図書館の強みと弱みも明らかになる。実例を挙げると、9類(文学)の蔵書が多く、0類(総記)が少ないため、百科事典(030)の購入を長期計画で行う。ほかにも、0類や1類(哲学)の利用頻度が低いため、それらのテーマボックスを設ける。また、教師が重宝した統計は、授業で利用された図書リストと指導案を1年分まとめたものだ。次年度の授業づくりに役立てられた。

また、②居場所づくりでは、気軽に入りやすい雰囲気づくりに努めた。たとえば季節の展示をしたり、植物やハーブを置いたり、男女ともに好まれるぬいぐるみを置いたりした。しかし、最も重要なことは児童生徒と学校司書が気軽に会話できる関係性だと考える。担任だからこそ相談できないことを、児童生徒の評価を行わない学校司書にはできる場合がある。これによって、いじめの早期発見につながったという事案もよく耳にする。

さて、左記のとおり学校司書には、3センター機能および居場所としての職務が盛り込まれた。しかし実際には、管理職の教師をはじめ、司書教諭、他の教師と連携を取りながらそれらの業務に当たらなければならない。そのパイプ役としての職務も学校司書の腕の見せ所になるだろう。

2014年に学校図書館法が一部改正され、学校司書の配置が努力義務となった。しかし、学校司書の職務が多岐にわたり、かつ高度化しているにもかかわらず、配置状況および雇用面で地方自治体に格差がある。早急に専任・専門・正規の学校司書が配置されることを切に願う。

学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する調査研究協力者会議

「これからの学校図書館担当職員に求められる役割・職務及びその資質能力の向上方策等について(報告のポイント)」 文部科学省 2014年

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/04/01/1346119_1.pdf

最終アクセス日 2018年10月15日

ことばをつかうこと／ことばにつかわれること

～ 新任のご挨拶にかえて ～

幼児教育学科 専任講師 高田 正哉

みなさんはなぜ学ぶのでしょうか。このことをどのくらいのひとが答えられるでしょうか。

上田女子短期大学は、専門職の養成だけでなく、liberal arts、直訳すれば自由学芸を学ぶ場です。自由学芸とは、自由人である市民が学ぶべき教養のことです。市民は学ぶことで、はじめて市民たりえます。学ぶことなしでは、市民は市民たりえないといっても過言ではないでしょう。

その学びのためにあるのが、図書館です。図書館は、みなさんの自由な学びのためにあります。だからこそ、国立国会図書館には、「真理はわれらを自由にする」(Η ΑΛΗΘΕΙΑ ΕΛΕΥΘΕΡΩΣ ΕΙ ΥΜΑΣ, 希語)という言葉が刻まれています。学ばなければ、ひとは自由になれないのです。「自由」、これが学びの中心なのです。そして学びは、わたしたち皆が自由になるためにあるのです。これはどういう意味なのでしょう。

このことを、ことばをつかうということから考えてみましょう。わたしたちは、ことばをつかうことで、わたしたちの思いをあらわします。ことばは、目の前にいる他者には見えない、わたし自身の思いを、どうにか伝えるためにもちいられます。では、なぜことばでなければいけないのでしょうか。それは、ことばのみが、お互いの思いをわかりあう唯一の道具だからです。

しかし、ここであるアポリア(困難さ)が生じます。それは、ことばにしなければみなさんの思いは伝わらないのに、みなさんの思いをことばにしたとたん、みなさんの思いは、昔誰かが言ったことのくりかえしになるということです。ことばは、誰かがかつて思いを伝えるときに使ったものです。そうである以上、みなさんがことばをつかうと、みなさんの思いは昔いた誰かの思いと同じものになってしまいます。あるいは、こんなこともあるかもしれません。みなさんは、誰かに思いを伝えたい。でも、相手には思いが伝わらない。だから、「自分の思いを十全にあらわしたわけではないけど、このことばで相手に思いを伝えよう」、こんなことです。自分の思いが、誰かの思いにかすめとられる気持ちになると思います。いいかえれば、みなさんはことばをつかうことで、ことばにつかわれてしまっているのです。

でも、みなさんの思いは今まさにいるみなさんの思

いですよ。この思いは、他の誰のものでもない、あなたのもので。でも、自分の気持ちをあらわすことばが見つからない… このことを超えるために、どうすればいいのでしょうか。このことについてただできることは、学ぶことをやめない、ということにしかないと僕は考えています。どんなに学んだところで、みなさんの思いをすべて伝えることばは見つかりません。しかし、みなさんの思いをよりよく伝えることばは見つかるかもしれません。あるときは哲学書の中に、あるときは詩集のなかに、あるときは映画のなかに… みなさんは、みなさんの思いをわかるために、学ばなければいけないのです。そのようなことを、アメリカの思想であるプラグマティズム(pragmatism)では「希望」(hope)といいます。みなさんが、みなさんの思いを伝えて、お互いにわかりあうという、そんな「希望」のために学ばなければいけないのです。

図書館は、こんな「希望」のために人類が永く生きてきたなかでかたちづくった場です。こんなことも思いながら、図書館に訪問してみてくださいと、学ぶ意味もみえてくるのではないのでしょうか。





本の面白さを伝える人に

幼児教育学科1年 保科 里帆



私は幼い頃から本が好きでした。特に小中学生の頃は、毎日のように図書館に通い、面白そうだなと感じた本を次々に借りて読むくらい、本を読むことに熱中していました。私が休み時間に本を読んでいると、「何を読んでいるの?」「その本読んでみたい」と友達も本に興味をもってくれることもあり、図書館で同じシリーズの本を借りたり、家にある漫画や小説の貸し借りをしたりすることで、感想を共有することができました。このような本を通して生まれるコミュニケーションはとても楽しいものでした。

本の面白さに気づいていない人からみれば、本はつまらないものかもしれませんが、絵が少ない本には、文章を読んで感じとったままに「こんな世界なのではないか」と自分で想像することができる楽しさや面白さが眠っています。

本を読むことをおすすめしている私ですが、高校生の頃からだんだんと忙しくなっていき、本からは遠ざかっていくばかりで、現在はほとんど本を読んでいません。年齢があがるにつれて、本の面白さに気づき、

熱中していく人もいる一方で、他に面白い趣味を見つけるなど様々な理由で、本から離れていく人もいます。私は後者の方でしたが、本学に入学して再び本と関わり始めています。それは、絵本の読み聞かせのボランティアをする図書館サークルに入ったからです。

サークルでの活動を通して気づいたことは、本に興味を持っていない子どもたちは、まだ本の面白さを知らないのではないかとことです。なぜなら親が共働きであったり、核家族化で子どもとゆっくり過ごす時間がなかなかとれず、本の面白さを伝えることができないのではないかと考えたからです。考えてみると私は、本を好きになったきっかけは覚えていませんが、子どもの頃に絵本の読み聞かせをしてくれた先生や家族のような、本の面白さを伝えてくれる人がいたからこそ、本の面白さを知ることができて本を好きになったのだと思います。だからこそ私も、子どもたちが大人になっても本を好きでいられるような、絵本の読み聞かせや紹介ができる保育者になりたいです。



『本』が教えてくれたもの

幼児教育学科2年 矢沢 明日香



私にとって本とは、「新しいことを教えてくれるもの」だと思っています。「新しいこと」とは、知らなかった事実から、考え方、感情等のことです。私は本を読むことによって、これらのことを教えてもらっているのだと思っています。

私は小さな頃から本を読むことが大好きでした。特に好きな本の分野は小説です。小説に書かれている文章を読み、描かれている挿絵を見て、頭の中で「今こんな表情なのではないか」、「こんな風に動いているのかな」等、想像を膨らましていくことが大好きでした。そして、年齢を重ねるにつれ、「私だったらどうするだろう」「こんな登場人物がいたら面白そう」等、自分で物語を展開したり、創造したりすることも楽しくなりました。また、ファンタジー系の小説が特に好きで、登場人物の関係性や敵と戦うときのスリルやワクワク感を抱くことがとても面白くて好きでした。小説は、私に緊張感やワクワクする気持ち、喜びや悲しみ等、様々な「感情」を教えてくれました。そして、想像(創造)することの楽しさも教えてくれました。

大学に入ってからは、エッセイ等も読むようになりました。悩み事があり、つらい時にこのような本を読み、新しい考え方を教えてもらっていました。「ありがとう」という言葉の大切さ、「幸せ」とは何か等、本を読めば読むほど自分の中にある世界が鮮明に、鮮やかに色づいていくような感覚に面白さを感じていました。そして、もっと知りたい、もっといろんな世界を見たいと思うようになりました。エッセイ本は、私に新しい考え方を教えてくれたと同時に、好奇心を持つことで人生が豊かになるということも教えてくれました。

このように私は、本を読むことでたくさんのことを学んできました。今まで読んできた本に出会ったからこそ、今の私がいるのだと言っても過言ではないでしょう。これからも出会っていく本に様々なことを教えてもらうのだと考えています。そして、その本から教えてもらったことを胸にしまい、これからも成長し続けていきたいと考えています。また、一冊の本との出会いをこれからも大切にしていきたいです。

好きな本

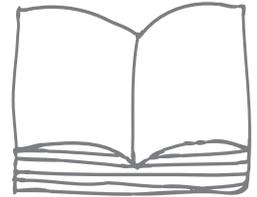
総合文化学科1年 宮澤 恵衣

私は、幼いころから図書館に行き本を借りることが好きでした。家の近くにある公共図書館で本を入れるかばんがいっぱいになるまで借りていました。しかし、読み終えた本は数えるぐらいしかありません。理由は、難しくてなかなか読み進めなかったり、分厚くて読み終えることができなかつたりと途中で飽きてしまうことが多かったからです。ですから、読書は難しいことだと思っていて、少しだけ苦手でした。

ですが、今の私はいつも本を持ち歩くぐらい読書が好きです。読書が好きになったきっかけは、姉に薦めてもらった一冊の本でした。その本は『西の魔女が死んだ』という、主人公の女の子が魔女と呼ばれるおばあちゃんと一緒にすごして成長していくお話です。この本を読んだときはちょうど学校について悩んでいて、主人公の悩みと重なったり、考えていることがわかつたりして、あっという間に読み終わってしまいました。このとき初めて、本を読もうと意識して読むのではなく、物語にひきこまれて読み終わりました。そして、読書が楽しいと感じました。

私の将来の夢は、図書館司書教諭です。本は誰かの悩みを解決したり、心の支えになったりすることもあります。そんな大切な一冊を一緒に見つけるお手伝いできればよいなと思ったからです。私が姉にしてもらったように、本と人をつなげる素敵なお仕事です。今、短大では図書館司書教諭の資格取得を目指して勉強しています。図書館にある図書の種類や管理の仕方など専門的なことが多いです。知らないことが多く、覚えたり調べたりすることが少し大変ですが、図書館司書教諭について知ることができてとてもわくわくします。難しいことも図書館司書教諭に近づいていると思うと楽しいです。

図書館司書教諭になるにはこれからも大変なことが続くと思いますが、いつか誰かと素敵な一冊をつなげられるようにがんばりたいと思います。



国立国会図書館での研修を終えて

総合文化学科2年 坂田 果穂

私は、国立国会図書館 東京本館での研修に参加しました。10日間の研修では、東京本館や分館である最高裁判所図書館の見学と、各課から業務内容の説明およびそれに関わる実習を主に行いました。初日から多くの課を回り、今まで授業で利用してきたNDLサーチやレファレンス共同データベース、NDL ONLINEの裏側でどのような作業が行われているのかを学びました。また、授業では学べない東京本館の全体的なサービスや資料の受け入れ作業や複写作業、マイクロフィッシュの扱い方、古典籍資料のデジタル化作業なども学ぶことが出来ました。特にマイクロフィッシュは閲覧するために特殊な機械を必要とし、滅多に触れることが出来ないため、とても良い経験になりました。資料のデジタル化作業については、資料の保存状態はもちろん、デジタル化作業する職員は、白もしくは黒の服を着用し、アクセサリは身につけないなど十分気を遣っており、とても驚きました。また、普段なら入ることの出来ない国会の議員食堂で「国会カレー」を食べることが出来たのも良い経験になりました。

この長いようで短かった10日間の研修を通し、インターンシップで気がついた地方公共図書館の課題解決と、自分の課題解決に活かせるようなことも多く学びましたが、それ以上に、今まで知らなかった国立国会図書館の役割と、それに関する苦労を身にしみて感じました。また、この研修に参加するまでは、堅い雰囲気でなんとなく利用するのは気が引けていたのですが、展示会を行っていたり、インターネット限定の利用が出来たり、思いの外利用しやすいことがわかったので、今後の卒業研究を進めるにあたってぜひ活用したいと思いました。

司書を志す者として、この10日間の研修で学んだ多くのことが無駄にならないように、また地域に還元できるようにこれからも頑張りたいと思います。そして、この研修に参加するにあたってお世話になった先生方、両親、親戚と、一緒にこの研修を行い、慣れない環境に不安を抱えていた1歳下の私に優しく接してくれた他大学の3人に感謝したいです。

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本



幼児教育学科 教授 上原貴夫

①これは読んでおこう
『児童の世紀』

エレン・ケイ 小野寺信・小野寺百合子訳 富山房

およそ100年ほど前に書かれた本。100年ほど前は19世紀。20世紀は「児童が発見された世紀」といわれる。このきっかけの一つがエレン・ケイ。これによって児童が発見

371
Ke 67

されたといわれる。子どもは子どもらしくという意味である。この時代以前は、子どもは大人を小さくした状態としてとらえられていた。これ以降、子どもには子どもとしての特性があり、決して大人を小さくしたものではない。そのため子ども時代には子どもらしく過ごすことが大事であり、子どもとして大切にされなければならないといわれる。



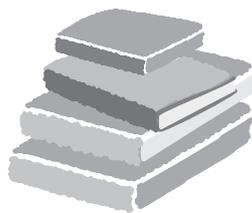
総合文化学科 教授 長田真紀

①私の読書の中から
『シッダールタ』

ヘルマン・ヘッセ著 高橋健二訳 新潮文庫など

ヘッセは、今日、多くの日本人が軽んじている東洋的世界観を、極めて高く評価したドイツの作家である。私は十代の後半からヘッセの文学が好きだったが、初老に入った今も、本作品を含め、数編を読み続けている。

主人公シッダールタは、裕福な商人のカーマスワームから、あなたができることは何か、と問われた時、「私は考えることができます。待つことができます。断食することができます」と答える。断食することは私には到底無理だが、「腹八分」に置き換え、この三つを実践していきたいと日々思っている。



943.7
H 53

②これは読んでおこう
『危機の構造』

小室直樹著 中公文庫など

小室直樹は不世出の天才である。叶うことなら、弟子入りしたかったとも思う。読者の興味や関心、研究分野が何であれ、小室直樹の著作からはものごとの本質を見抜く洞察力を学べる。

本書は、「急性アノミー」によって、社会が崩壊の危機に瀕してしまう状態が論じられているが、日本の近現代文学を専攻する私にとっても、大切な視座となった。

361.6
Ko 69

③本学刊行物の中から
本誌 上田女子短期大学附属図書館報
『みすず』のバックナンバー全て

今回、第45号の刊行となったが、これまで寄稿された先生方や学生の皆さんの文章を通して、幅広い分野の書物の存在や各々の考え方・価値観を知ることができた。また、昔日(多くは青年時代)、それぞれの方が図書館で過ごされた姿も想像され、毎号、味読している。

2018年 本学教員の最新刊著作 (今年発行の単独著書・共著書・分担執筆書) 著者の五十音順

- ・大橋敦夫 先生
『旧和学校校舎(和記念館)所蔵教科書目録』
2018年3月発行(共著)
- ・高田正哉 先生
『これだけ覚える! 保育士重要項目 '19年版』
成美堂出版 2018年12月発行(共著)
『ドンドン解ける! 保育士一問一答問題集 '19年版』
成美堂出版 2018年12月発行(共著)
- ・山本一生 先生
『よくわかる! 教職エクササイズ1 教育原理』
ミネルヴァ書房 2018年10月発行(共著)

375.9
Ky 8

A376.14
H 81
2019

A376.14
H 81
2019

371
Y 79



上田女子短期大学附属図書館企画展

学びの成果を発表する場として昨年度にスタートし、好評を得た1階ブラウジングルームでの図書館企画展。今年度は学生の皆さんの作品も増え、盛り沢山な内容の展示となりました。

企画展Ⅰ 4月

平成29年度 幼児教育学科1年生「児童文化」
(指導：山本一生専任講師)

絵本作品展

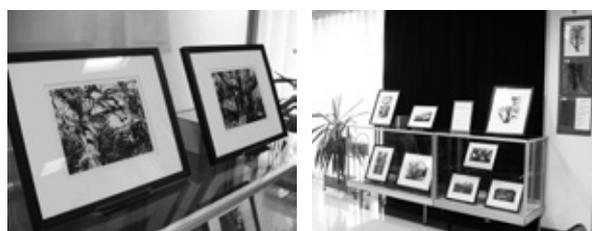
前年度後期の「児童文化」の授業で学生が制作した絵本を展示しました。手作りならではの温かさ溢れる作品が揃いました。



企画展Ⅱ 5月

笹井弘教授によるフォトグラヴィ作品展
植物達の時間 ー木相あるいは木態ー

笹井先生が、東京・神奈川・山梨・長野の各地で、木々の様々な様相や姿を表現した作品を展示しました。繊細な描写が美しい作品の数々でした。



企画展Ⅲ 6月

幼児教育学科1年生「図画工作」(指導：笹井弘教授)
陶芸作品展

「図画工作」の授業で学生が制作した箸置きとぐい呑みを展示しました。ユニークな形や、可愛い絵付けがされたものなど、個性豊かな作品が並びました。



企画展Ⅳ 7月～8月

総合文化学科2年生「図書館サービス特論」
(指導：非常勤講師 山浦美幸先生)
図書館への誘い

「図書館サービス特論」の授業で学生がグループごとに図書館ボランティアを企画。その活動の様子や、制作した壁面飾り、テーマブックなどを展示しました。足を運ぶと気持ちが明るくなる、賑やかな図書館になりました。



企画展Ⅴ 9月～12月

非常勤講師 中村好男先生・
総合文化学科2年生「書の研究」(指導：中村好男先生)
書道作品展

中村先生の作品と「書の研究」の授業で学生が制作した作品を展示しました。力強く書き上げられた作品が壁一面に堂々と並ぶ様子は圧巻でした。



図書館では、個人やゼミ・サークル等の団体の作品展示の企画を募集しています。学習や活動の発表の場としてぜひ活用してください。気軽に図書館カウンターへ声を掛けてください。

第20回図書館総合展

(10月30日(火)~11月1日(木) 於：パシフィコ横浜)

図書館総合展は図書館に関わる団体や企業が出展し、さまざまなフォーラムを行ったり、各ブースで商品やサービスを紹介するイベントです。

大学や団体の活動を紹介するポスターセッションに、図書館サークルFLCが参加しました！



図書館サークルFLCが作成したポスター展示



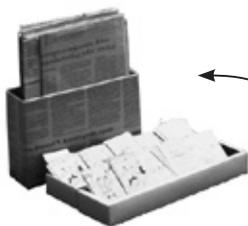
会場にはおよそ80団体のポスターが並びます



じっくり展示を見て回る来場者



サークルで取り組んでいる活動について写真とあわせて紹介



お土産のしおりと英字新聞のエコバッグも大好評でした



来場者数 31,774人

パシフィコ横浜

みすず

第45号

上田女子短期大学附属図書館報
2018.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館・紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019
E-mail：lib@uedawjc.ac.jp

編集後記

a postscript by the editor

図書館からの発信 2018

「みすず」第45号をお届けします。

今年度もこうして紙媒体での発行ができました。ご寄稿いただいた方々、そして、お読みくださる皆様に心から感謝申し上げます。

図書館には、今年もたくさんの新しい仲間(本、雑誌、絵本、紙芝居、DVDなど)がやって来ました。我先に選んでほしいと、それぞれが強烈な自己主張をし、光彩を放ち、人間との関わりを切望しています。ぜひとも図書館で、あるいはご自宅で、ご一緒の時間をお過ごしください。

例年よりもずっと暖かな信州の冬を楽しみながら、新年を迎えようとしています。

附属図書館長 長田真紀